

地域社会における「高齢者サロン」の 体験学習をととした教育効果(その2)

鍋島恵美子, 立川かおり, 馬場由美子
吉村浩美, 福元健志

(西九州大学短期大学部 生活福祉学科)

(平成 26 年 12 月 22 日受理)

The Educational Effect Through the Work Study in "Senior Citizen Salon" in a Local Community (its 2)

Emiko NABESHIMA, Kaori TATIKAWA, Yumiko BABA
Hiromi YOSHIMURA, Takesi HUKUMOTO

(*Department of Life Welfare, Nishikyushu University Junior College*)

(Accepted December 22, 2014)

地域社会における「高齢者サロン」の 体験学習をととした教育効果(その2)

鍋島恵美子, 立川かおり, 馬場由美子
吉村浩美, 福元健志

(西九州大学短期大学部 生活福祉学科)

(平成 26 年 12 月 22 日受理)

The Educational Effect Through the Work Study in "Senior Citizen Salon" in a Local Community (its 2)

Emiko NABESHIMA, Kaori TATIKAWA, Yumiko BABA
Hiromi YOSHIMURA, Takesi HUKUMOTO

(*Department of Life Welfare, Nishikyushu University Junior College*)

(Accepted December 22, 2014)

Abstract

Department of Living and Welfare, Heisei Kishima County Kōhoku was conducted in 24 year students participated in the “empty house, vacant store playback investigation business in Kamiyoda district”, and of “elderly Salon” in the verification result “community experience summarized learning to Bulletin as education effect (Part 1)”, which was through. in Kōhoku, has been working in earnest “regional activation business utilizing the empty house, vacant store” from 2013 fiscal year, of the Department of students participated from November for the vacant store renovation to the “elderly Salon (aka tea salon only)”.

In this paper, practice the contents of the students who participated in the “tea only salon”, and etc. What kind whether learned things in interaction with the elderly, are summarized on the basis of the questionnaire surveys to students about the education effect.

Students, through the recreation of practice that they had planned, we aim to elderly and communication, has failed and realize a lot of successful experience, experience learning by visiting the region, as well as recreation of the way, depopulation region of current situation and healthy senior living reality, even such as the importance of preventive care it has been found that it is able to learn naturally.

Key words : Area revival business 地域再生事業
Senior citizen salon 高齢者サロン
Recreation レクリエーション
Work study 体験学習
Educational effect 教育効果

1. はじめに

西九州大学（以下本学）では、文部科学省が平成25年度から実施している「地（知）の拠点整備事業」の採択を受け、「西九州大学グループ地域連携センター」を設置し、大学グループとしてその機能を地域に還元し、地域社会と連携を図りながら、教育や研究・地域貢献を進め「活気あるまちづくりと人づくり」を目指している。

本学短期大学部では、これまでそれぞれの学科で、教育の一環として地域貢献活動を多く取り入れ、体験学習をとおして、社会に貢献できる実践力豊かな人材育成に努めてきた。平成24年度には、江北町の要請で「上小田地区における空き家・空き店舗再生調査事業」に短期大学部の各学科が参加し、生活福祉学科（以下本学科）の学生は、平成25年3月「高齢者サロンを開設するための検証事業」に参加した。その結果については、平成25年度紀要に“地域社会における「高齢者サロン」の体験学習をとおした教育効果(その1)”としてまとめた。

江北町では、この検証事業を踏まえ、平成25年度から本格的に「地域活性化事業」を開始しているが、本学科の学生は、空き店舗（旧雑貨屋）改修工事のため、平成25年の11月から「高齢者サロン（通称：お茶のみサロン）」に参加することになった。11月、12月、1月は、ほぼ毎週1回参加したが、平成26年度は、江北町の要望で6月から月に1回参加した。この間の7月に、江北町と永原学園は「包括的地域連携協定」を結んだことから、今後は、さらに全学的に地域活性化事業に学生の積極的参加が期待されているところである。

本稿では、平成25年度・26年度に「高齢者サロン」に参加した学生の体験学習をとおした教育的効果について、アンケート調査等を基に（その2）として報告する。

2. 高齢者サロンの実施状況

1) 実施した日時

平成25年11月・12月は、平成24度の入学生（2年生）31名が授業として「高齢者サロン」へ参加、平成26年1月は、平成25年度入学生（1年生）34名と専攻科保育福祉専攻学生11名が参加した。実施日時は表-1のとおりである。

表-1 平成25年度「高齢者サロン」実施日

時間	13:30~15:00	時間	10:00~11:30
1	11月11日(月)	6	12月20日(金)
2	11月18日(月)	7	1月10日(金)
3	11月25日(月)	8	1月17日(金)
4	12月2日(月)	9	1月24日(金)
5	12月9日(月)	10	1月31日(金)

平成26年度は、6月～12月まで平成25年入学生（2年生）34名および専攻科保育福祉専攻学生9名が参加した。実施日時は表-2のとおりである。

表-2 平成26年度「高齢者サロン」実施日

時間	13:30~15:00		
1	6月3日(火)	5	10月3日(金)
2	7月8日(火)	6	11月28日(金)
3	8月7日(木)	7	12月19日(金)
4	9月25日(木)		

2) 実施内容

本学では、隣接する生涯学習センターで水曜日に地域の高齢者を招き「生きがいがづくり教室」を実施しているが、本学科の学生は、その3限目に「レクリエーション活動援助法Ⅰ」（1年後期）、「レクリエーション活動援助法Ⅱ」（2年前期）の科目として、レクリエーションを提供している。レクリエーションは、学生がグループごとに企画し、リハーサルを経て実施しており、その準備には相当の時間や労力を費やしているが、本番では参加高齢者から多くの意見を頂き、それが気づきや自信に繋がっている。

江北町における「高齢者サロン」は、このレクリエーションをさらに元気な高齢者向けにアレンジして上小田地区に出向き実施した。実施内容は、学生（6人～9人グループ）がそれぞれ自己紹介の後、アイスブレイキング（緊張をとほぐすため、軽い体操や手遊びなど）を行い、用意したレクリエーションを実施。その内容は様々であり、10人から20人の参加者を2グループに分け、ボール遊びや頭の体操等、身体を使うゲームや静かなゲームを織り交ぜて実施し、チーム対抗で行うゲームが多かった。ティータイムの時は、学生が高齢者の方々にお茶を出して談笑。学生は、参加者から実施したレクリエーションの感想を聴いたり、これまでの仕事や苦労したこと、自分の健康、楽しみ、家族のこと等々いろいろな話題が飛び出し、和やかな一時を過ごしながらか、コミュニケーションを図ることで、元気高齢者の現状や過疎地域で暮らす高齢者の実情等を知ることができ、座学では得ることができない貴重な体験ができていた。高齢者サロンの対象者は「生きがいがづくり教室」の高齢者より元気な高齢者が多く、実施する前は戸惑うグループも見られたが、参加した高齢者からとても喜んでもらい、「楽しかった、また来てね」という声が多く聞かれると、学生からも口々に「楽しかったね」という声が聞かれ、帰りの車中での表情は達成感に満ち溢れていた。高齢者サロンの模様を平成25年12月の佐賀新聞の記事より紹介する。

“福祉学ぶ学生、高齢者とダンスでふれあい”

西九州大短期大学部で福祉を学ぶ学生が2日、江北町上小田の「お茶のみサロン」を訪れ、地元の高齢者とダンスやゲームで触れ合った。参加者は学生の若さに力をもらい、はつらつとして大笑いしていた。

サロンは、小田商店街の空き店舗を活用した地域活性化に取り組む町の事業として毎週火、木、金曜の午前中に旧井上百貨店を開放している（お茶代、お菓子代で100円が必要）。普段は地域おこし協力隊のメンバーが湯茶の接待や話し相手として常駐する。

学生は介護福祉士などの資格取得を目指す生活福祉学部2年生7人。石原区の15人を招待し、かごにボールを投げ入れるゲームや記憶力クイズなど、体と頭を活性化するために考案したレクリエーションを楽しんだ。参加者は「おながよじれるごと笑うたー」と満足げだった。

参加した川久保明好さん（79）は「若い人が来てくれることで町が元気になる」と笑顔。学生の古賀みづきさん（19）は「場を盛り上げることができるか不安だったが、『また来てね』と言ってもらえてうれしい。就職してもこの一言を思い出して頑張れそう」と話した。

（佐賀新聞ニュース平成25年12月4日）



軽体操

3. 学生のアンケート調査より

江北町の「高齢者サロン」に参加した後、学生に振り返りのためのアンケート調査を行った。

【アンケートの項目】

- (1) 実施した内容
- (2) 高齢者の反応
- (3) 失敗したことや反省したこと
- (4) 喜ばれた内容
- (5) 高齢者サロンに参加して勉強になったかどうか
- (6) 勉強になったか（又はならなかったか）具体的内容

アンケートの概要は下記のとおりである。

1) 実施した内容

○自己紹介

自分の名前の他、各グループでテーマを決めて自己紹介

○アイスブレイキング

- ・ストレッチ ・手遊び ・きよしのずんどこ節（体操）
- ・ミランバ君体操 ・お父さん体操（準備体操）
- ・「世界に一つだけの花」に合わせて体操
- ・弟子じゃんけん ・体操「365歩のマーチ」等々

○身体を動かすゲーム

- ・輪投げ ・風船リレー ・玉渡しリレー ・点アウト
- ・旬のもの釣りゲーム ・だるま落とし ・お手玉ダーツ
- ・物送りガチャガチャリレー ・将棋倒しゲーム
- ・足でバタバタ波ちゃっぷん ・リンゴの皮むき 等々



身体を動かすゲーム



身体を動かすゲーム

○頭を使うゲーム

- ・ことわざいろいろ ・擬音カルタ ・漢字パズル
- ・みんなの気持ちわかるかな ・漢字博士
- ・イントロドン！ ・紙芝居（金色夜叉）
- ・漢字ワード ・マンカラ 等々

○クールダウン

最後に気持ちを静めるための整理体操や歌を歌った。

- ・季節にちなんだ歌（豆まき・雪・お正月・年の初め）

・上を向いて歩こう ・おやすみ体操 ・炭坑節 等々

2) 高齢者の反応

- ・笑顔で楽しくされていた
- ・元気がよく白熱しておられた
- ・よかったと好評だった
- ・もう一度やりたいといわれた 等々

高齢者の反応は、全体的に「楽しそうだった」の意見が多かったが、次のような意見もあった。

- ・「幼稚すぎる」と手遊びや体操を嫌がられた
- ・ルールが複雑で分かりづらそうだった
- ・全員が楽しめている様ではなかった等



頭を使うゲーム



頭を使うゲーム

3) 失敗したことや反省したこと

- ・時間配分通りにいかなかった
- ・事前に参加者数を知ることができず、ルールをその場で変更しなければならなかった
- ・予想した人数より多かったので対応に困った
- ・打ち合わせ不十分でスムーズに進行できなかった。
- ・緊張して声が出なかったこと。
- ・体操の振り付けを簡単にすべきだった
- ・頭を使うゲームが難しすぎた
- ・2つのグループに分けたが、能力に差があり上手くいかなかった

- ・ゲームとゲームのつながりが難しかった
 - ・分かりやすい説明ができなかった
 - ・時間配分と初めの入り方の難しかった
 - ・もっと話したかった
 - ・声が小さく聞こえていないことがあった
 - ・室内の把握ができていなかった
 - ・ルールを理解してもらうのが大変だった
 - ・もっと高度な内容にすればよかった
 - ・ダンスを伝えるのが難しかった
 - ・職員の方との連携があまり良くなかった 等々
- アンケートは、この項目への意見が最も多く、学生は、臨機応変に対応することの難しさと、元気高齢者への対応の難しさを感じたようだ。

4) 喜ばれた内容

- ・炭坑節を踊ったとき
- ・ことわざを思い出して楽しめたといわれた
- ・競争のゲームで勝利したとき
- ・季節に応じた行事などを取り入れたこと
- ・久しぶりに熱くなれたこと
- ・漢字を皆で話し合いながら夢中でされていたとき 等々

5) 高齢者サロンに参加して勉強になったかどうか

勉強になったかどうかの質問に対しては、「とても勉強になった」「まあまあ勉強になった」と答えた学生が殆どであり、「あまり勉強にならなかった」と答えた学生は3人だった。

6) 勉強になったかどうかの具体的内容

○勉強になったこと

- ・子供向きの曲でも工夫することで盛り上がる（幼稚すぎるといった参加者も、楽しくされていた）
- ・炭坑節など昔なじんだ盆踊りが高齢者は好きである
- ・参加者の反応を見ながら司会進行をすることの大切さ
- ・高齢者の目線に立ってゲーム内容を考えていく難しさ
- ・いかに楽しんでいただけるかを考える機会となった
- ・対象者の把握が不十分で環境も違う場合は、臨機応変の対応が必要である
- ・対戦することで意欲が上がること
- ・元気な方への接し方
- ・対応方法や声かけのタイミング
- ・メンバー全員で計画を立て準備しておくことが必要
- ・レクリエーションは高齢者の生きがいにつながると再確認できた
- ・役割分担が大切である

- ・両方のチームを称えることが大切
- ・高齢者の反応も様々で今後を考える視点となった
- ・高齢者サロンでの過ごし方が理解できた
- ・元気高齢者の動きやどんな話をすればいいか学んだ
- ・地域の高齢者の交流やレクリエーションの実践の難しさ
- ・高齢者がどんなことで楽しめるのか分かった
- ・レクリエーションを組み立てる上で、配慮や基準をどこに置けばよいかを考える良い機会となった
- ・説明の仕方や場所の使い方
- ・施設に入所されていない方の意見を聞くことができた
- ・どのような内容が盛り上がるのか、楽しんでもらうためにどのように工夫すればよいかを学ぶことができた
- ・チーム分けにも意義があると感じた
- ・高齢者とのコミュニケーションの回り方 等々

○あまり勉強にならなかった意見

- ・準備時間が不十分で新たな工夫をしなかった
- ・想定内で終わった

4. 参加高齢者の意見

平成26年12月19日(金)今年の最後の「高齢者サロン」の参加者に、今後の参考にするため意見や感想を訊ねた。この日に初めて参加したという高齢者ばかりで10名の参加だった。

(1) 高齢者サロンへの参加について

- ア. 積極的に参加 (5名)
- イ. 誘われるので参加 (4名)
- ウ. 仕方なく参加 (1名)

高齢者サロンは、上小田の小地区ごとに呼びかけて参加を募っているとのことで、積極的に参加された高齢者は半数であり、特に一人暮らしや閉じこもりがちな方に対しては、地区のリーダー的な方が参加を勧めていることがうかがえた。

(2) 参加の理由(複数回答可)

- ア. 健康づくりのため (7名)
- イ. 友人と会えるから (3名)
- ウ. 楽しいから (8名)
- エ. 暇つぶし (2名)

参加の理由は健康づくりと楽しいからの意見が多い。健康に対しては、ほとんどの高齢者は気にかけていることが分かった。

(3) 学生のレクリエーションについて

- ア. とても楽しかった (9名)
- イ. まあまあ楽しかった (1名)
- ウ. あまり楽しくなかった (0名)

学生のレクリエーションは、全員の方が「楽しかった」と回答された。特にチーム対抗の当てゲームは盛り上がり、活気に溢れていた。

(4) レクリエーションの企画について

- ア. 今の企画で十分である (8名)
- イ. もう少し工夫してほしい (2名)

この日は専攻科保育福祉専攻の有志の学生が担当だったので、専攻科はレクリエーション活動の授業がないため、高齢者に対するレクリエーションの機会がなく、時間が余ってしまった。そのため、参加者にも自己紹介をお願いしたり、コミュニケーションを図る時間を多くもつことができ、学生にとっては、かえって多くのことを学べたと思う。

(5) 今後の参加について

- ア. 今後も参加したい (7名)
- イ. その時の気分で参加 (3名)
- ウ. あまり参加したくない (0名)

参加者は元気な男性の高齢者が多く、趣味など積極的に活動されていた。若い学生と話したり、触れ合うことが楽しそうだった。

(6) 今後したいレクリエーションがあれば教えてください。

- ・ゲーム (1名)
- ・身体を動かす運動みたいなもの (1名)
- ・社交ダンス (1名)
- ・ジャンケン大会 (1名)

(7) あなたの健康づくりについて教えてください。

- ・ウォーキング (2名) ・体力づくり (1名)
- ・ゴルフ (1名)
- ・スクワット等を入れてウォーキング (1時間) (1名)
- ・散歩 (1日40分) (2名) ・野菜づくり (1名)
- ・介護予防教室「いきいき体操」(週1回) (1名)
- ・小さい山登り (1名) ・地区の体操 (月1回) (1名)

5. まとめ

佐賀県は、全国的にも過疎地域が多く、いろいろな課題を抱えている市町が多い。江北町も過疎地域の一つであり、総務企画課の坂元弘睦氏は、『上小田地区は、炭

鉦閉山後、人口減少により地域活力が失われ、少子高齢化の進展と相まって独居高齢者は増加し、空き家や空き店舗の増加、地域コミュニティの希薄化等々、地域課題が顕著に表れてきたが、このようなマイナス要素とみられがちな空き家や空き店舗の間取りや利用条件を変えることによって、それらが地区の活動拠点として再生できるのではないかと考え、「お茶のみサロン（高齢者）」「子育てサロン」等を考えた。また、今後の展望として、今回、産学官の連携により、将来にわたって地域に活力を生み出す仕組みをつくりあげることができたが、今後この仕組みをいかに効率よく継続していくことができるかが重要になっていくものと思われる。（中略）大学や高校については、平成26年度以降も上小田地区をフィールドとしてソフト事業（高校生ケーキカフェ、新商品開発、高齢者及び子育て支援など）の充実を図ることで、地域貢献に携わっていただきたい。』（平成26年4月特集 経済循環による地域の経済創造より一部抜粋）

また、少子高齢化の進展は、大学全入学時代となり、大学教育の質の低下、定員割れ等、大学としても多くの課題を生んでいる。短期大学においては、これまで短期の高等教育機関として地域社会を支える職業人材の育成に努めてきたが、18歳人口の減少や学生のニーズの変化等、定員割れは厳しさを増すばかりである。平成26年8月6日の中央教育審議会大学分科会大学教育部会の「短期大学の今後の在り方について」（審議まとめ）によると、「我が国は、将来的には人口減少と都市に集中する傾向に拍車がかかり、地方都市が衰退、消滅していくことが危惧されている。このような事態に陥らないよう本格的に地域再生を図っていくことが不可欠であり、地域における高等教育機関の存在は極めて大きな意義がある。」また、「我が国の高等教育機関は、社会に一層開かれた機関として、産学官連携の推進を始め、社会経済の

活性化や地域コミュニティの形成に積極的に貢献することが求められてきており、それらに資する開かれた教育の在り方が重要になっている。」さらに、「地域と短期大学が密接に連携しながら、人々の学習ニーズを把握した上で、短期大学の学習資源を有効に活用した多彩なプログラムを展開することが期待される。」とある。（第2章

今後の短期大学の役割と機能 1. 短期大学の役割・機能(2)(4)より一部抜粋)

特に、我が国は、団塊の世代が65歳に到達し、これからますます高齢者が増加する一方で、若者の介護離れや介護職員の離職率は高く、介護福祉士養成校の定員割れや介護現場の介護人材の確保が大きな課題となっている。現在、厚生労働省は、介護が必要になった高齢者も、住み慣れた自宅や地域で暮らし続けられるように、「医療・介護・介護予防・生活支援・住まい」の五つのサービスを一体的に受けられる「地域包括ケアシステム」の構築を推進しており、このような状況下で、介護福祉士の役割は、本人・家族と地域社会とのつなぎ役となると同時に、地域の課題を掘り起こし発信する等、一層重要となってくるだろう。

今回の江北町における「高齢者サロン」への学生の参加は、レクリエーションの提供をとおして、過疎化地域の現状や元気高齢者の介護予防対策、コミュニケーションの必要性、高齢者の理解等、多くを学ぶことができたと考える。また、本学科の教員も毎回学生に付き添って状況を把握したが、今後の介護福祉士人材養成について考えるよい機会になった。決められた授業の中で、地域に出向き活動することは、学生にとっても教員にとっても厳しいことではあるが、学校では得ることができない教育的効果がある。これからも市町から要請があれば、地域貢献活動を積極的に行い、体験学習をとおして実践力のある、また、地域で必要とされる介護福祉士養成を目指していきたい。